

東野圭吾の『あなたが誰かを殺した』は2021年に刊行された「加賀恭一郎シリーズ」の一冊だ。加賀シリーズといえば、刑事の加賀恭一郎が鋭い洞察力で事件を解き明かす作品が多い。しかし、この本は少し違っていった。物語はある豪邸でのバーベキュー・パーティーから始まり、そこで過去に起きた殺人事件の真相が語られていく。登場人物の誰かが犯人なのだが、その答えを見つけるのは簡単ではない。

本作の大きな特徴は語りの形式にある。多くの推理小説は探偵役が調べたことを読者に説明していく形が多いが、この作品では関係者それぞれが一人称で出来事を語っていく。つまり読者は複数の視点から同じ事件を見聞きすることになる。だが、語り手が必ずしも正直に話しているわけではなく、自分に都合のよい部分を強調したり、あえて隠したりしているのだ。読む側は、その中から何が事実で何がごまかしなのかを判断しながら、自身なりの解釈を見つけ、読み進めなければならない。まるで自分自身が事件を解決する参加者になったような感覚を味わえた。

まず良い点として、この「読者を巻き込む仕組み」が挙げられる。誰かの証言を読んで「この人が怪しい」と思うと次の章でそれを否定するような別の証言が出てくる。そのたびに予想が覆され、ページをめくる手が止まらなくなった。単なる犯人探しではなく、人がなぜ嘘をつくのか、なぜ真実を語れないのかという心理にも触れられているところがこの本の深みだと感じた。たとえば、登場人物の一人は自分が犯人だと疑われないように微妙に情報を操作し、別の人物は家族や親しい人を守るために事実を隠す。また、嫉妬や不満、過去の出来事への後悔など、感情の複雑さが絡み合うことで、単純な「事件解決」の物語ではなく、人間の心の奥にある葛藤や弱さを体験できる構造になっている。このように、嘘や隠された真実の背景にある心理を探ることができる点が、本作の推理小説としての面白さだけでなく、人間の心の奥深さを考えさせる「深み」につながっている。

また、登場人物たちの関係性も興味深い。裕福な家庭の中で表面上は穏やかに見えても、実際には嫉妬や不満が積み重なっている。家族や親戚の中だからこそ口にできないことがあり、それが事件の裏に隠されているように思えた。東野圭吾の作品は「人間とは何か」という問いを常に含んでいると感じるが、この本でもその要素は強かった。

一方で、弱点もあった。シリーズの主人公である加賀恭一郎の存在感が、これまでの作品より薄いことだ。彼は観察者の立場に近く、事件を一気に解決する場面は少ない。加賀が好きでシリーズを読んでいる人にとっては、少し物足りないかもしれない。また、語り手が頻繁に変わるので、慣れるまで「今誰が話しているのか」を確認する必要があり、読みやすさの面ではやや難しかった。

しかし、この難しさは裏を返せばこの作品の新しさでもあると思う。これまでの「探偵が導く推理小説」に比べて、読者が自分の頭で考える余地が大きい。私はむしろそこに面白さを感じた。登場人物の証言をどう受け取るかは読み手次第であり、人によって違う見方になるはずだ。だから、友達同士で読んで感想を話し合うのにも向いている本だと思った。

読み終えたあと一番心に残ったのは「犯人は誰だったのか」ということよりも、人が嘘をつく理由や、真実を語れない事情の方だった。人は自分を守るために嘘をつくこともあれば、誰かを守るために黙ることもある。本当のことを言うのが必ずしも正しいわけではないという現実を突きつけられたように思う。この点はただの推理小説として楽しむだけでなく、人間のあり方について深く考えさせられる部分だった。

まとめると『あなたが誰かを殺した』は、叙述の工夫と心理描写の深さで読者を強く引きつける作品だ。確かに登場人物の多さや視点の切り替えには慣れが必要だが、それ以上に事件の裏にある人間の思いや嘘を考えさせられる点に価値がある。加賀恭一郎シリーズの新しい挑戦として読むのもよいし、推理小説が初めての人にもおすすめできる。読み終わったとき、自分がどんな「真実」を選び取ったのかを振り返ることができるだろう。ぜひ多くの人に手に取ってもらいたい一冊だ。